

「あ！萌え」の構造：序論

(2)

応用人間科学研究科 齋藤清二

11. 「萌えの本質」を論ずることはなぜ難しいか？

前節では、「萌え」という現象が、生物に見られる普遍的現象である「ホメオスターシス」とは真逆の、「対象をある程度手に入れてもそれで満足せずに探求行動がさらにエスカレートしてしまう」という性質をもっているのはなぜか？という問いについて考察してきた。そして、そのようなエスカレート傾向を推進しているメカニズムの可能性のひとつとして、私達が「萌えの対象」と認識しているものは、実は「真に私達が手に入れたいもの」とは微妙にズレているのではないかという可能性を提案した。それでは、その微妙にズレているものとはいったい何なのだろうか？あるいは、ズレているといっても、それは具体的にはどうズレているのだろうか？

この問題を探求することは難しい。え、

最初からそう言われたら考える気がしなくなるって？ いや確かにそのとおりで、私もすでにイヤになりかかっているのだが、それに挑戦するのが、この「序論」の大きな目的なので、愚痴は我慢して先にすすんでみようと思うので、みなさんにもつきあって欲しい。それにほら、原稿の締め切りが過ぎていたので、編集者に怒られるのは怖いではないか。

話を戻して、この探求は難しいという理由をまず整理してみたい。まず第一に、この問いは言ってみれば「真実とは何か？」といった類いの問いと同型だからである。ズレを認識するということは、私達が「ズレがズレとして認識されるための基準点」をすでに知っているということが前提になる。つまり、偽物が分かるためにはあらかじめ本物が分かっている必要があるということである。ところが本物がすでに分かっているのなら、偽物など最初から問題にな

らないはずである。だから、出発点から矛盾なのである。

しかし現実に私達は、こういう経験をよくする。つまり「正解は何だか分からないが、『これは違う！』ということだけは分かる」というやつである。こういうことは結構よく起こるのだが、当人は、それはなぜ違うのかを説明できない。強いて言えばそれは直観としか言いようがない。最近の世の中には「直観なんてそんな非科学的なものは信用できない！」という人が多いので（こういう「科学的」な人は、大学とか研究所とかそういうところに偏在して生息しているので、私にそう見えるだけかも知れないが...）、むしろ世間一般では、「直観こそが一番信頼できるもの」という人も結構いるのである。

話はズレるが（←おい！）。（非合理的な）直観が大切か、（合理的な）思考が大切か？という議論に対して、「いやそれはタイプの違い」と、あっさりと割り切ってしまうような考え方は意外と古くから存在している。みなさんご存じのユング心理学の性格類型（え、知らない！ それはいっこうに差し支えないですよ）などはその典型である。人間の自我機能をまず心的エネルギー（いきなりエネルギーとか波動とかを持ち出すからオカルトとかトンデモとか言われるのだが、これはあくまでもメタファーであって文字通りの物理学的現実ではない）の方向性によって「外向」と「内向」にわけ、さらに合理的判断機能として「思考」と「感情」にわけ、さらに非合理的機能として「直観」と「感覚」に分ける。人によって傾向がはっきり現れる人と、そうでもない人はあって当然なのだが、それでも全ての人（…と言い切ってしまうところが怖いのだが…）、例えば、

「外向—思考—直観」とか「内向—感情—感覚」とかいう3点セットの組み合わせで類型化される。いやいや、最新のパーソナリティ理論（ビッグファイブとか）を学んでいる人達は、このような類型論は科学的根拠がないから信用できないと言うだろうが、そもそもその態度自体が思考優位タイプのなせるわざなのです。

もう一つユングの類型論でおもしろいのは、これらの自我機能の類型的パターンは定まった静的なものではなくて、その人にとって優勢な機能（例えば思考）は、それに対立する劣勢な機能（例えば感情）によって補償されると主張していることである。その人の一生を通じての成長過程（これをユング心理学では「個性化」と呼ぶのだが）において、その人の成長や変革に重要な働きをするのは、むしろ優勢な機能ではなくて劣勢な機能である。ぶっちゃけていうと、ヒトは自分の優勢機能と通常は同一化しているが、人生のどこかの時期に自分がそれまで気づいていなかった劣勢機能に気づき、自分自身の劣勢機能の助けを借りることによって、より全体的な自分に成長する道を歩むというストーリーがユング心理学では想定されている。ここで、もうひとつ重要なことは、劣勢機能への自覚が初めて生じる時には、それは「自分ではないもの」として認識されるということだ。つまり、優勢機能と同一化した「自分＝自我」の視点からは、“自分の”劣勢機能は「他者＝他我」として認識されるということである。これを深層心理学の用語では、「投影」というわけだが、このへんの理屈になってくると、あとで批判する、深層心理学にありがちな、「あんたが自分の無意識を意識化できないのは

けしからん」式の難癖とあまり区別のつかない論理構造になってくるので、このへんはこれくらいにしておく。

もちろんユング心理学は、現代の「科学的心理学」から見れば「科学的な根拠をもたない」信用できない理論ということになっているが（え、そうだったのという人もいるとは思いますが）、人間は、自分自身あるいは他者との交流を通じて、自らのストーリー（自己物語）を常に生成し変容していく存在であると考える立場（物語論）から見ると、まだまだ捨てがたい魅力と有効性をもった理論なのである。ちょっと長くなったので、ユング心理学の基本的な世界観と「萌え」の関連については、またあらためて論じたいと思う。

話を戻すと（←またかよ！）、つまり、私達が「萌えの対象」と認識しているものは間違いであって、私達が追求すべきものは実はただひとつの「真なるもの」である、といった前提そのものが、なかなかやっかいなものなのである。え、どうしてそれがいけないかって？ いや別にいけないということはない。ただ、私はたぶんそれはうまくいかないだろうと思っている。え、なんでそう思うのかって？ ぶっちゃけて言えば、人類始まっていらい、それは幾多の天才達や天才でない人達（つまり私達のような凡人のこと）が、数限りない機会に挑戦してきたが、たぶん成功していないからである。しかし心配はいらない。私はこのような問いの解答を得ることは難しいと思っているが、だからといって、その探究をやめたほうがよいとは思っていない。そのような探求を続けることには意味がある（たぶん）。それに例え意味がないとしても、少なくとも

もそのような作業は楽しいではないか。

しつこいようだが具体的な問題は、その「萌えの対象とよく似ているがズレているもの」あるいは「ズレているもののズレを生み出しているその微妙なもの」（あー！ややこしい！）にある程度接近し得たとして、それが「真」のものであるかどうかを判断する基準を設定するのが難しいということである。誰もが納得する基準がすでにあるのであれば、その「真のもの」はすぐに見つかる（だろう）。しかし、そもそもそれが「真」であるかどうかは、基準があって初めて判断できるのであるから、これはどうどうめぐりのニワタマ論争になるのである。

話題はそれるが（←いいかげんにしろ！）、これと良く似たようなことは、何らかのこれまでには確立されていなかった新しい病気や障害や症候群などの新しい概念が提唱される時によく生じる。例は何でもよいのだが、例えば「スマホ依存症」などというのは、これまでは存在しなかった疾病概念の代表である。だって、スマホがない時代にはそんなものは存在しなかったことは確実だから。ところがある時に誰かが、「現代の若者の半数はスマホ依存症だ」などと言いだし、マスコミがそれを大げさに報道する。どこかの大学の学長が、「スマホやめますか、大学生やめますか？」などと、入学式の訓示で言ったりするので（実話）、ますます「スマホ依存症」なんて病気（？）が本当に実在すると多くの人は信じ込んでしまう。

しかしそれでは、ある学生が「スマホ依存症」であるかどうかはどうやって判断するのか？ 多くの場合、それは「スマホ依存症尺度（あるいはチェックリスト）」なるものを作って、それによって判断するのである。

例えば複数項目からなる質問に答えさせる自己記入調査表を作り、カットオフ値というものを決め、それによって、大学の授業で学生の調査をしたり（←授業の評価と絡めると倫理違反だから気をつけよう）、インターネットでホームページを作って調査をしたりする（たまに詐欺もあるから気をつけよう）。そうすると酷い場合には全体の半数以上の学生がスマホ依存症と診断されてしまう。

少しでも「エビデンスに基づく医療：EBM」について勉強したことのある人であれば、こういったやりかたは明らかにおかしいということに気づく。新しく作られたスマホ依存症のチェックリストは、その診断能力（感度、特異度、陽性的中率、陰性的中率、尤度比など）のエビデンスが実証されている必要がある。そのためには、スマホ依存症の人とそうでない人を判別できるゴールドスタンダード基準との比較が必要になる。しかしスマホ依存症のゴールドスタンダードは前もっては存在しない。もしあったとしても、そのゴールドスタンダード自体が何を基準に作られたのかという問題が生じる。だからスマホ依存症診断チェックリストのエビデンスは理論的に実証不能なのである。スマホ依存症などという病気は存在せず、それは恣意的に作り出された仮の診断基準とそれに基づく診断ツールによって作り出された幻の現象に過ぎない。（ここでは、かなり荒っぽい議論をしているので、厳密に言えばこのようなアプローチに全く意味がないとも言えないが…）

というわけで長くなったが、（←勝手に長くしているのだろう）、要するにここで言いたいことは、「萌え現象の本質」に迫ろうと

する努力には著しい困難があり、直接的なアプローチは難しく、周りを回るように絡め手から接近するしかないということなのである。（え、そんなこと最初から分かっているじゃあないか、と言いたくなるあなたは正しい。ごめんなさい）

そこで、次なる戦略として、「萌えの本質」に直接迫る作戦ではなく、とりあえず、「萌え」と非常に区別しにくい、それとは微妙にズレているものについて考察していくことにしたい。（異論の多くなるテーマであることは承知の上である）

12. 「萌え」とよく似ているが 区別すべきものの候補（1）

そこで、「萌え」の本質について語ろうとするときに、一番扱いにくく、かといって避けて通れないものとして、単刀直入に「性欲」の問題について論じてみたい。「萌えの対象とは要するに性欲の対象なのではないか」という言説は、おそらく大きな議論を巻き起こすか、あるいは反対に「それってあたりまえでしょう、今更何を？」と言われるかのどちらかだろう。最近では、某市のマスコットキャラの「萌え表現」が「性的搾取ではないか？」「性的差別ではないか？」ということで、大きな議論を巻き起こしている。具体的な問題に踏み込むと炎上は避けられないので、ここでは不本意ではあるが抽象的な議論に留める。

で、結論から先にいうと、「そのどちらも間違いとは言えない」というふうに私は思っている。「萌え」の問題を扱う時に、「性欲」の問題を避けては通れない。しかし、「萌え」

と「性欲」は同一のものではないし、少なくとも「萌え」は「性欲」には単純に還元できないというのが私の考えである。

その論拠の最大のものは、「性欲とはほとんど関係を持たない萌え」というものが存在するからである。ただし、このような見解に対しては、色々な方面からの反論があり得るだろう。一番単純なものは、「性欲に関係ない萌えがあるなどという主張は、自分の性欲を抑圧するか否認しているに過ぎない、要するにごまかしているだけ」という見解だ。これはもちろんそう考えざるをえない場合もある。しかしこの古典的精神分析の見解によく似た主張は、実はとてもずるいやり方なのだ。「おまえが〇〇に『萌え』を感じるのは、要するに『性欲』に過ぎない」と言われて、「そうかも知れない」と言えば、「ほーらそうではないか」ということになるし、「違う」と言えば、「それはおまえが無意識の欲望を否認（あるいは抑圧）しているからだ」と言われる。

このような「お前は自分の無意識を意識していないのだ」という言説は無敵である。言い換えればこのような言説が他者に向かって用いられる時、それは絶対に否定できないが、結局のところ不毛であり、意味のある結果をもたらさない。それは要するに言葉を発する方が絶対に負けないための戦略なのだ（最近はこの「どこまで上目？」などという）。だから近年、若い人を中心にそのことを見抜く人が増え、精神分析的言説は前ほど信用されなくなったし、進歩的集団を名乗る輩が昔よく使った「総括せよ！」「自己批判せよ！」「それは自己責任！」みたいな言説は、多くの人からうさんくささの目で見られるようになった。良い

ことだと思う。自分が意識できない自分の領域に思いを馳せるという行為は、それを「自分が行う」時にのみ意味のある行為となる。他人にそれを強制することは欺瞞的で非倫理的な行為である。

話がそれだが、性欲が「萌え」を増強させることは、おそらく間違いない。だから萌え現象が人生において最も強い影響力を持つ年代は、思春期から青年期である。しかし、だからといって萌えは性欲そのものではない。萌えを「何かに強く魅せられる現象」と定義するならば、それはまだ生物学的には性欲が感情や行為の前面には出てこないような幼い時代にも明らかに認められる。

精神分析はおそらく、それを意図的に逆転させ、幼児にも性欲があると倒錯的に理屈づけしてしまった。さらに言うと、あきらかに生物学的には性欲の必要性が無くなる、あるいは非常に低下する、生殖年齢を過ぎた老年期にも「萌え」はあきらかに存在する。もちろん、定年間近の老教授や、あっと驚くような高齢者が、普通に考えれば色恋沙汰としか思えないような事件を起こしたりすることがあるのも事実である。だからといって、それを全て性欲に還元するのは無理がある。むしろ、「萌え」=「何かに強く魅惑される現象」は、対象を変えつつ（あるいは不変の対象に対して）一生涯持続すると考えるほうが実情に合っている。このあたりは実証的に証明することが非常に難しいので、もともと見解が違ふ人とは水掛け論に陥ってしまうことはある程度避けられないが…。

一方で、性欲は萌えを増強し、萌えは性欲と容易に結びついてしまうということも多くの場合事実であろう。これはおそらく

人間の生物学的、生理学的、あるいは心身相関的な基本的メカニズムによると思われるので、これを無視することはできない。くりかえしになるが、「萌えは性欲にすぎない」という説を完全に否定する科学的証拠を提供することはできない。しかし、「萌え」と性欲との緊密な関係を認めつつも、萌えを単純に性欲に還元することなく本質を探究する姿勢を保つことは、人間にとって非常に重要なのではないかと思うのである。どうも、考察というよりは意見表明みたいになってしまったが、人間にとって、自身あるいは関係の中での性欲の影響をどのように扱うかは極めて難しい問題であることは認めた上で、できるかぎり萌え＝性欲という単純化した図式に陥らないようにする努力は、重要なことだと私は思っている。

少し露骨な話になって恐縮だが、萌えと性欲の関係が絶対のものでないというもうひとつの証拠は、身体的な性欲の満足は、必ずしも萌えの探求を減少させないということである。これは、「萌え＝性欲」という単純化に対する一定の反論を根拠づける。つまり一時的な身体的な結合に基づく関係は、決して長続きしないのである。異性（同性でも良いが）における身体レベルでの結合が、永続的な関係を維持することは極めて少ない、言葉を変えれば、ハッピーエンドが永続するような恋愛物語がほとんどないということも、この見解を補強する。性欲は萌えよりもさらに永続性に乏しい上に、エスカレーションの悪循環にはまり易い（モーツアルトのドン・ジョバンニのオペラを見れば一目瞭然だろう）。それゆえに、性欲はおそらく萌えの本質ではなく、むしろ萌えの「みせかけの部分」に参与している

と考えられるのである。だから、萌えの本質に接近しようとするならばむしろ、性欲と萌えを同一視しないことが重要になるのではないかと思うのである。一応、性欲と萌えの関係については、はぎれが悪いがこれで終わりにする。次に性欲と一見似ているが、ある意味かなり違う概念としての「恋愛」を取り上げることにして、今回はここで終わる（次回に続く…と思う [たぶん]）。



[追記]:先日久しぶりに衣笠キャンパスへ出勤したところ、バス停の向かい側に2015年度の国勢調査の大きなポスターが掲示してあった。その図柄を見てちょっとびっくり。ついに日本国総務省も「萌えキャラ」を作ったのか!と思ったのだが、どうやら勘違いで、彼女らは、京都伏見稲荷にゆかりのアニメのキャラであるらしい。ちなみに京都市の地下鉄の「萌えキャラ」の名前は「太秦萌(うずまさ・もえ)」というので、もろに「萌え」の字が使われている。いや、だからどうというわけではないのだが、追加してみました。